

平成28年度第8回（震災後第72回）
陸前高田市保健医療福祉未来図会議 議事録

テーマ：「子どもたちが希望を持ち、元気に育つ陸前高田づくりに向けて（2016
秋）

～子ども・子育て環境と取り巻くそれぞれの現状とこれから～

日時：平成28年11月11日（金）13：30～15：30

場所：陸前高田市役所 4号棟第6会議室

参加：40名20団体

資料：下記にアップ

<http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>

1. 挨拶

菅野民生部長：

子ども・子育てのテーマは2年ぶりぐらいで、その間も子ども・子育て環境は変わって震災以降とは別の課題も出ている。地域課題として子ども・子育てに取り組んでいくことになる、行政、地域、NPOで課題を共有しながら、お互いに手を携えていくのが今後の取り組むべき姿ではないかと思う。きょうは現状の課題と今後の思いを共有しながら、それぞれの立場でできることも含めて協議していただきたい。

2. 内容

(1) 未来図会議のめざすこと ～一人ひとりが元気になる地域づくりに向けて～

・陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏

(2) 報告（ハイリスク、ポピュレーション2つの視点で振り返るこの3年…）

報告 「陸前高田市役所 子ども子育て課から」

・陸前高田市民生部 子ども子育て課長補佐 佐藤勝也

〃 子ども家庭係長 千葉祐子

報告 「参加者のみなさまから」

・岩手県立大船渡病院 小児科医長 森山秀徳氏

(3) グループで「はまってけらいん、かだってけらいん」

- ・テーマ：これから安心して生活できる子ども子育ての環境づくり、地域づくり
- ・子どもと地域の関わり現状は？これから誰が何を仕掛けていけるのか？

(1) 未来図会議のめざすこと ～一人ひとりが元気になる地域づくりに向けて～

(陸前高田市地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏)

人が健康になるためには「はまってけらいん、かだってけらいん」、地域にみんなが集まってつながりを強化することがトップに来る。地域のつながり（ソーシャル・キャピタル）の3要素は信頼、ネットワーク、お互いさまと言われているが、ソーシャル・キャピタルは、子育てにも非常にいい影響がある。ジェフリー・ローズが言うように子育てでも「ハイリスクな個人へのアプローチは効率的だが、子育てに関して、この陸前高田という集団全体に広く分布しているリスクが何かを考え、地域をどう変えていくかを市民・多機関運動として展開していく必要がある。今日は子育てにかかわっている多くの方に、このような視点で皆様の発表を聞いていただければと思う。

(2) 報告（ハイリスク、ポピュレーション2つの視点で振り返るこの3年…）

報告 「陸前高田市役所 子ども子育て課から」

(陸前高田市民生部 子ども子育て課課長補佐 佐藤勝也)

震災で子育て環境が大きく変化したので、子どもと保護者が希望を持てる環境づくりを行いたい。陸前高田市の課題は保育士の不足で、通常の保育を行うのに精いっぱい、病児保育や一時保育になかなか人を回せない状況である。また、中心市街地、高田、今泉が再建途上で周辺地域に人口が集まっているが、保育所はそれほど大きくつくっていないため、かなり窮屈な保育になっている。

また、陸前高田市では児童虐待に限らず家庭問題込みの平成27年度の児童相談が平成7年のおおむね1.8倍ぐらいであり、配偶者等へのDVも平成13年度と比較し、昨年度までで17.5倍の増加となっている。

ポピュレーションアプローチとは集団的なリスクへのアプローチであり、保育の実施

は行われているが、それ以外の取組はまだ不足している。ハイリスクアプローチとは個別に行うアプローチで、虐待相談、通告による家庭調査になる。行政機関としてはハイリスクアプローチ中心の事業展開に加え、ポピュレーションアプローチもできるだけ行いたいと考えている。

(陸前高田市民生部 子ども子育て課子ども家庭係長 千葉祐子)

自宅の再建や災害公営住宅が完成し、被災前のコミュニティへ帰れた方はストレスが軽減されたのではないかと。また、遺児や孤児は里親の委託や相談支援体制が確立され、居場所ができて安心感が生まれた反面、進学や就職等自身の状況が変化し、安心とストレスの両面があると思う。

子育て世帯の状況は、休業していた企業の再開や復興需要に伴う求人増で、大船渡管内の求人は1.9倍と全国平均を上回っているが、子どもの遊び場不足で子育て世帯でストレスを抱える方もいると思う。そのような親の状況を見ている子どもは不安や心配が大きくなり、これらが継続的に続くと子どもの成長、発達に長期的に悪い影響を与える。

ハイリスクへのアプローチは、虐待を起こしやすい親の特徴を捉えた早期発見、早期対応や、配慮が必要な子どもへの支援の充実、地域など子どもを取り巻く方への教育や支援が必要である。ポピュレーションアプローチは子どもの生命や権利を守り、一人一人の子どもの健やかな育ちを保障する視点で、地域や社会が保護者や家庭に寄り添い、子育ての不安を和らげる支援、地域、社会で子どもを育てていく雰囲気づくりが大切と考えている。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

人間関係が希薄化する時期に急増しているのが、児童虐待相談件数である。児童虐待は、ほとんどがハイリスクアプローチである。児童相談所に保健師をふやすのではなく、地域でみんなが虐待をしなくてもすむような社会をつくらなければいけない。子どもが育つ環境を何とかしなければいけないが、熊谷晋一郎先生は「自立は、依存先をふやすこと。希望は、絶望を分かち合うこと」と仰っている。我々は何ができるのか考えたい。

報告 「参加者のみなさまから」

(岩手県立大船渡病院 小児科医長 森山秀徳氏)

子どもの肥満と虫歯が岩手県は高いので、私は「B l o o m i n g T A K A T A」を立ち上げ、子どもの肥満や虫歯に対して定期的にセミナー・交流会を開いている。また、肥満、虫歯以外で大事なことは、しつけ方である。この地域は子どもを強くしつけることが多いと思うが、一部には心がもたなくなってしまう子もいる。子の自律性を保ち、能力ではなく努力を褒めることである。

震災から時間がたち、どれが大事かを見きわめなければいけない。市役所はいろいろな事業をしっかりとやっていただき、各業種・異職種間の連携を行うことである。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

この3年こうだった、今はこうではないかなど、一言ずつでもいただけたらうれしい。

きらりんきっず 伊藤昌子氏：

まだ震災の状況と余り変わっておらず、自宅再建や夫婦そろって子育てという環境で、知らないうちに我慢して生活しているのではないかと感じる。保育所も希望のところに入れず、子育てしにくい状況を感じており、若い世代が一息つくような場所もできていない。子育て支援拠点事業はふえてきているので、コミュニティで若い親子を育て、これから地域を担っていく人たちにも目をかけた支援が必要ではないかと思う。

あしなが育英会 レインボーハウス 長島明子氏：

山田と陸前高田の地区と分かれ、震災遺児・孤児・保護者のグリーフサポートをしている。当時小学生だった子が高校生になり、参加が減っているが、震災当時おなかにいた子が今は小学校低学年となり、その子どもたちが参加している。子どもたちの遊び方を見ていて、高田のほうは遊び場が少なく、思いっきり遊べていないと感じる。レインボーハウスを陸前高田に建てて、地域の社会資源として活用いただけたらと思う。

子どもグリーフサポートステーション 大塚光太郎氏：

震災に限らず、大切な人を亡くしている子どもたちのサポートをしている。楽しそう

に遊んでいる子たちでも、いろいろなものをたくさん抱えていることを大人たちがしっかりとキャッチできるかがとても大切だと思っている。地域の課題として、今までの歴史や文化も含め、そこに震災があってという多様な視点で重層的に考えなければならぬことを改めて感じている。

大船渡地域こころのケアセンター 吉田氏：

陸前高田市でも最初の年から訪問や相談室を継続しているが、親御さんやおじいちゃん、おばあちゃんが抱えている問題は、子どもにも本当に多く影響を与えていることを感じている。

児童家庭支援センター大洋 大和田氏：

子育てに関する相談支援をしているが、被災する・しないにかかわらず、子ども本人が抱える課題・悩みに触れることが多い。一人の子どもを育てるためには村人全体が必要なのだというくらい、大人の力が子どもには大事だと感じている。里親制度が震災後にすごく普及したが、里親について学ぶ研修をしたいと思っている。

子育て支援センター 菅原氏：

勢いのあるお母さんたちをバックアップして、いい関係ができればと思っている。今は独立した形の子育て支援センターだが、併設型では保育所の様子が見られたり行事参加等のよさがある。そこを生かしながら、今後利用者をふやして頑張っていこうと思う。

子育て支援センターにこにこ 佐々木氏：

子どもの足で歩ける公園が近くにあればいいというのが、お母さんたちの話題である。ダンプが行き交っているので歩いていける状態ではないが、危なくないところがあればという生の声である。

子育てセンターたかた 鈴木葉氏：

高田の子育て支援センターは10月1日から開設され、他機関との連携等も本当にこれからという感じである。高田保育所側も支援センターの併設が初めてだと思うので、保

育所側とも手探りで、いい方向に持っていければと思っている。個人的には来ていない方、ほかから嫁いできた方に目を向けていきたい。

NPO法人福祉フォーラム・東北 長友氏：

震災直後から子どもたちのグリーンケアをしてきたが、事業の見直しで本年度の途中で休止になっている。それと入れかわりで市内のきらりんきっずや、あゆっこが朝日のあたる家を利用するようになり、虹の架け橋（遊具）が約1年前にできたので、子どもたちが前よりも来てくれるようになった。朝日のあたる家は高齢者の利用が多いが、子どもたちが来るとすごく喜ぶので、異世代間・多世代間で交流できればと考えている。

NPO法人パクト 古野氏：

私どもは震災後に子ども支援のために立ち上げた団体で、みちくさルームという活動を、県内外の大学生のボランティアと市内の4カ所で定期的に継続実施している。また、震災後に遊び場情報の冊子の作製・市内配付をきっかけに、子どもに関するイベント情報や乳幼児健診の日程などをまとめたフリーペーパーの不定期発行や、市内の小中学校に必要な学用品の寄贈を行っている。

こちらに引っ越して、若い人が少ない地域だと感じている。みちくさルームでは子どもに年が近いお兄さん・お姉さんとの交流が子どもにとっていい刺激になっている。

気仙沼市役所保健師 吉田氏：

気仙沼市では10月1日から子育て包括支援センターを立ち上げ、妊娠届け出を受理したときから担当の保健師が支援していく形でやっている。お母さんの支援が虐待予防の部分でも大事だと思う。

地域包括ケアアドバイザー 佐々木亮平氏：

きょうはグループディスカッションの発表の時間はないが、感想などお話しいただければと思う。

(3) グループディスカッション

- ・テーマ：これから安心して生活できる子ども子育ての環境づくり、地域づくり
- ・子どもと地域の関わり現状は？これから誰が何を仕掛けていけるのか？

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

ポピュレーションアプローチ、要するに地域をどう変えていくかが問われている。絶望をもっと分かち合う必要があると思った。森山先生からも連携という話をいただいたが、お互いの信頼関係、ネットワークをもっと広げていかなければならない。

きょう率直に感じたのは、つながる場、気楽に集まれる場が必要。はまかだができるスポットをどれだけふやして共有できるのか、もっとみんなで真剣にやらねばならない。

3. その他連絡・アナウンス

- ・映画「増田進 患者と生きる」上映会実行委員会

蒲生 哲氏：

増田進さんは乳幼児死亡率ゼロを行った旧沢内村の院長先生で、沢内村の保健課長も務め、官民一体の医療をした形で非常に斬新である。映画はドキュメンタリーで、私の手元にチケットがあるので、勉強の意味でも見ていただければいいと思う。

地域包括ケアアドバイザー 岩室紳也氏：

陸前高田市の健康増進計画に「住民とともにつくる、住民で支える医療に取り組む」とある。私も医者だが、患者や地域に支えられているというのはあるので、そういう視点で映画を見るとまた違うおもしろさがあると思う。

◇ 次回：平成28年12月16日（金）

メインテーマ（仮）：エンド・オブ・ライフケアと地域コミュニティ

～地域でその人らしく最期を迎えるために～

会場：市役所第4号棟 第6会議室